様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　４月１７日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）

研究期間：2007～2010

課題番号：１９５２０５９４

研究課題名（和文）日本中世における内水面の環境史的研究

研究課題名（英文）Environmental Historical Research on Inland Waters in Medieval Japan

研究代表者

橋本　道範（HASHIMOTO MICHIMORI）

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・主任学芸員

研究者番号：１０３４４３４２

研究代表者の専門分野：歴史学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史・環境史・内水面・琵琶湖・漁撈・消費・村落

１．研究計画の概要

本研究は、日本列島の内水面の中世的特質を究明して、そこにおける漁撈を中心とした生業の実態と展開を解明し、その上で、そうした環境を管理する主体としての村落の歴史的意義を考察することを目的としたものである。具体的には、(1)内水面の環境の中世的特質の解明、(2)推移帯での多様な漁撈の解明、(3)都市における魚介類消費と漁撈秩序との関係性の解明、(4)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明を行う。

２．研究の進捗状況

(1)まず、内水面の環境の中世的特質の解明に関しては、中世では陸域と水域とが推移する推移帯（エコトーン）がかなりの範囲で広がっていたことが推定されたため、推移帯をテーマとする研究について若干の研究史整理を行い、学際的な協業による環境史研究の可能性について主張した。また、推移帯が中世史料では「河辺」、「河原」などとして表現されていたことを推測した。加えて、陸域から水域に推移した際の「河成」という土地把握システムについて検討した。

(2)推移帯での多様な漁撈の解明に関しては、推移帯での漁撈を検討した結果、海人などの専業集団だけではなく、在地領主から一般の荘民まで多様な主体が漁撈と関わっており、専業的な大規模漁撈からその日の暮らしのための小規模漁撈まで、多様な漁撈が併存していたことを明らかにすることができた。

(3)都市における魚介類消費と漁撈秩序との関係性の解明に関しては、小規模な漁撈であっても村落の市場と結びついていたことを論証した。但し、魚介類の市場は都市を中心としていたと推測される。そこで、都市消費の動向が漁撈の秩序にどのような影響を与えたのか解明するため、中世の魚介類消費についての研究史整理を行った。

(4)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明に関しては、推移帯の利用主体は在地領主から一般の荘民まで多様であったことを前提として、その中での村落、特に、荘・郷・保などの上位の村落ではなく、現在の大字に継続する下位の村落が果たした歴史的意義について検討を加えた。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

推移帯の広がりが環境認識だけでなく、荘園制的土地把握のあり方にまで影響を与えていたことを明確にすることができた。また、推移帯での漁撈主体の多様性とその日の暮らしのための小規模漁撈の存在について史料から論証できた点も重要な成果である。したがって、おおむね順調に進展していると考えることができる。

４．今後の研究の推進方策

(1)都市における魚介類消費と漁撈秩序との関係性の解明

①都市における鮒の消費動向についての検討

すでに１５世紀の山科家の日記類から魚介類記事を抜き出したデータベースを構築しており、これをもとに鮒の消費の季節性を明らかにする。また、蜷川家の日記などにより、儀礼などでの鮒の利用のあり方についても検討を加える。

②中世前期の琵琶湖漁撈秩序の検討

鮒の消費の季節性に応じて、漁撈が中世前期ではどのように秩序化されていたのか、説話集や和歌などを手掛かりに明らかにする。そのための必要な基本文献については図書館・大学等で収集する。

③堅田鮒の消費と堅田漁撈の台頭についての検討

堅田鮒の登場について御伽草子など文学作品から論証する。その上で、堅田を中心とした漁撈秩序の再構築について、菅浦文書を中心として検討を加える。菅浦文書については完成度が高い翻刻は一部しかないため、滋賀大学経済学部附属資料館の写真帳もしくは原本で校訂する。

(2)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明

①奥嶋の自然的環境と歴史的環境の解明

琵琶湖東部の奥嶋を対象として、主に大嶋神社・奥津嶋神社文書と長命寺文書をもちいて、奥嶋の自然的、歴史的環境を追究する。内湖の実態については文学作品からも検討する。

②奥嶋の漁撈紛争の実態解明

漁撈紛争史料を分析し、漁撈主体の多様性を解明する。また、紛争の解決がどのようにはかられていたのかを明らかにして、漁撈の秩序構造を検討する。

③環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明

再編成された下位の村落が資源利用とどのように関わっていたのかについて論ずる。なお、関連する文献・史料についてはほぼ収集が完了しているものの、大嶋神社・奥津嶋神社については写真帳もしくは原本での確認が必要なものもある。そうしたものについては、滋賀大学経済学部附属資料館で閲覧を行う。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 橋本道範、日本中世の魚介類消費と一五世紀の山科家、琵琶湖博物館研究調査報告、25、7-16、2010 年、査読無

② 橋本道範、「環境史」研究の可能性について―佐野静代氏の業績の検討から―、歴史科学、196、42-52、2009 年、査読有

③ 橋本道範、日本中世における水辺の環境と生業―河川と湖沼の漁撈から―、史林、92-1、4-35、2009 年、査読有

〔学会発表〕（計３件）

① 橋本道範、日本中世における水辺の環境と生業について―河川と湖沼の漁撈から―、史学研究会例会、2008 年 4 月 19 日、京都大学大学院文学研究科・文学部新館二階第三講義室

〔図書〕（計１件）

① 橋本道範ほか、瀬戸内市、邑久町史　通史編 2009 年、199-240

〔その他〕

展示

橋本道範、齊藤慶一、滋賀県立琵琶湖博物館トピック展示、移（うつ）ろう大地を把握する―自然のリズムと中世の人々―、2009 年 6 月 23 日～7 月 12 日